S・ドラム　長編小説における心理主義について

（海野　未来雄　訳・解説）

（※年代等は必要に応じて訳者が加筆した）

叙事文学や戯曲において、作中人物の心の動きを、その芽生えから展開そして変化といった一連の動きの中で提示し、それによって性格描写を「内面から」掘り下げて個性ある人物として描き出すこと、その手法を心理主義[注1]と呼ぶ。最近のモンゴルの長編作品を概観してみると、そこにいくつかの重要な傾向が現れているように思えるが、大河小説や社会心理小説、あるいは政治風刺小説や歴史小説などが登場して文学ジャンルの幅がいっそう広がったことや、長編作品が歴史上の出来事や史実に高い関心を寄せるようになったことと並んで、我々がこれから話題にしようとしている心理主義もまた、そうした近年の傾向のひとつなのである。

心理分析が、文学、なかんずく叙事文学にとって重視されるべきものであるか否かといった問題は、一時はかなりの論議を巻き起こしたものであった。ソ連で最初に文芸理論が登場した当時、すなわち一九二〇年代には革命の勝利者たるプロレタリアートたちにとって、心理主義は反動的であり、ブルジョワ文学の特徴に他ならないのだという見方も存在していた。この時代の文芸理論家の中には、「反心理主義」の原則に基づき、物質的世界を描くことこそが、文学のより高度な発展段階なのだとする者すらいたのである[注2]。しかしながら、プロレタリア作家たるもの心理分析へ偏向するべからずといったこのような見方は、一九二〇年代のソビエト文学の試みによってすでに否定され、肯定的および否定的人物像の精神的な遍歴を深く抉り出したA・ファジェーフの『潰滅』（一九二七）や、M・ゴーリキーの『クリム・サムギンの生涯』（一九二五-三六）、M・ショーロホフの『静かなるドン』（一九二八-四〇）、A・トルストイの『ピョートル1世』（一九二九-四五）、あるいはL・レオーノフやM・ブルガーコフといった作家たちの作品が登場したのであった。そして第一回ソビエト作家大会（一九三四）の席上で、ゴーリキーが文学について、社会主義社会の人間が発展させている「精神のプロセス」をまだ十分には描いてはいないと示唆したのは、特に心理分析の重要性に目を向けたからだったのである。

今日のソビエト文学において、中でも長編作品においては心理主義的な傾向が主流をなしていることは我々もよく知るところであろう。とくに近年は理論書や教本の類にまで、心理分析が叙事文学の重要な特色であると記されるようになっている。

一方、わが国の文学について述べるならば、とりわけ長編作品において、心理主義がいかに発展してきたかを示す多くの具体例があることに気づく。例えばD・ナムダク[注3]の『国家騒乱の時

代』（一九六〇）の中でバルダンツェレン公が混乱した頭で転向を思案するシーンや、Ch・ロドイダンバ[注4]の『清きタミルの流れ』（一九六二-六六）中の、主人公エルデネが社会や個人生活の複雑な状況について苦慮しているシーン、あるいはB・リンチェン[注5]の『曙光』（一九五一-五五）において、バトバヤル老人が国家や家族の運命について憂慮しているシーンや、L・トゥデブ[注6]の『遊牧と定住』（一九七四）中の資産家ダンビーがふたつに分裂した人格の間で議論を闘わせている様子など、その試みを示す例は多く存在しているのである。

また、最近わが国の作家が注目し、批評家たちが特に指摘しているものに、いわゆる回想の手法があるが、これなども心理主義が浸透していることのひとつの証しといえるだろう。例えば最近書かれたいくつかの長編小説（S・ロチン[注7]の『齢の道』（一九八三）、S・エルデネ[注8]の『巡りくる人生』（一九八三）、S・ダシドーロブ[注9]の『愛しの歌う砂丘』（一九八三）のすべてがこうした回想的な手法を用いて書かれているのである。それ故に、『巡りくる人生』や『齢の道』といった題名が付されているのだろう。そしてまた、回想は心理主義的な手法のひとつであるばかりでなく、プロットの構成を形作る手法でもある。実際、前述したふたつの長編はほとんど偶然のいたずらによってプロットの点から見て極めて類似しているのだ。例えばS・ロチンの小説では、主人公の医師アマルトゥブシンは病床で自分の半生を回想しているが、一方、S・エルデネの小説においてもやはり主人公である学者ソロンゾンは入院中の身であって、快復するまでのあいだ、自分の思惟によって「人生をめぐり歩き」、どうやらテープに録音さえしているようなのである。しかしながら、このエルデネの作品にはひとつの特徴も存在しており、そこでは年代がふたつに区切られて、それぞれの年代から同時進行的に物語が展開してゆくという構成になっている。言い換えれば、生まれ故郷に始まり生まれ故郷で終わるという、物語をいわば閉じた輪のごときもの、円環のごときものにしようとする工夫がなされているのだ。思考は枝分かれしながらその矛先を次々と広げてゆき、ガルトハン山やガルタイ河付近のブリーヤート人家族、あるいはボグド宮殿、馬乳酒療養所[注10]からベルリン、デリーへと実に広大な地域を転々とし、年代的にも三十年代半ばから今日にいたるまでのほとんど半世紀もの歳月が網羅されている。

本作品では、主人公がサソリを餓死させてノロブにしっぺ返しをしたり、ごろつきの呪術師、ボロルドイが自分の母親の霊を呼び出そうとし、あるいはゲネンダリ妃に催眠術をかけようとしたり、避暑地においてソロンゾンがゲニーマーと分け合った生活上の秘密など、主人公の性格を個性あるものとしてはっきりと描き出した、数多くの精緻な心理分析がなされている。より具体的に述べるならば、ソロンゾンには学生時代、「西側の悪辣な学者であるメンデルやモーガンの遺伝理論を盲信した落ちこぼれ」と言われて学校を追われた過去があるが、そのとき彼はこう考えるのである。「卒業間際になって退学させられるほど屈辱なことはあるまい。もちろん、おれも最初は目の前が暗くなるほど動転したものだが、後になって、まるでそれが起こるべくして起こったかのようにすっと落ち着いてしまったのだ。それというのも自分がどういう人間になりたいのか当時はまだ分っていなかったからに

違いない。もしオドンツォーみたいに教師になると決めていたら、退学の知らせに立ち直れないショックを受けていただろう。ところがどうだ、実際は、大してノロブへの復讐に燃えることもなかったではないか。『それならおれは自分の道を行くとしよう』そういって歯を食いしばり、おれは去って行った。ノロブを憎んだところで仕方のないことなのだ」（五三頁）。ここにおいて主人公は、「最初は目の前が暗くなるほど動転したものだが、後になって、まるでそれが起こるべくして起こったかのようにすっと落ち着いて」しまう人間心理の微妙な綾を鋭く分析し、こうして落ち着いてしまった理由を「自分がどういう人間になりたいのかまだ決めかねていた」ことと関係があると見なしているのだ。

さらにこうして過失もなしに罰を受けたものの、それが「それならおれは自分の道を行く」といった目的意識の強い発露にまで変化を遂げ、自分が歩むべき道がここで表明されるのである。ソロンゾンが人生の目的を持ち、そこから決して後戻りする人間ではないことがここに示されている。そして、後に彼はサソリを何匹か手に入れるが、その中の一匹が仲間を食べてしまったのを知ると、それに「確固とした揺るぎない地位におさまったとたんに人の運命を弄ぶという病に取りつかれた人間のひとりである」ノロブの名前を与え、四ヶ月間も餌をやらずに餓死させてしまうのである。そしてそれによって彼はノロブに対する仕返しを完了したと見なすのだ。しかし、ソロンゾンはただ黙って運命を享受するような人間ではない。彼は「逆らってはいけない時に頑なに振舞い」面倒に巻きこまれはするものの、「仲よくお上品に学問をするようなこともしないで」「自分の思いを遂げるために闘いながら」遺伝学者として大成を遂げることになる。作品の前半ではこのように主人公の性格を心理分析によって極めてリアルに描き出しているのだが、それに続く部分では主人公の微妙な心理の襞を少しも鋭く描出してはおらず、「人生にはあらかじめ敷かれたレールはない」ことについてや、「人生では容易に自分の居場所が見つからない」ことについての、一般論的で無味乾燥なお題目が多くなっている。例えば、最初に相手を持ち上げておいてから叩きつぶすという狡猾さと、「自分の名前を永遠に刻みこもうとする」たったひとつの哀れむべき欲望に憑かれた教師ノロブと再びまみえることを除けば、ソロンゾンの人生でも唯一の重要な行為と思われるのは、「偉人たちの葬られている聖なる大地」であるモンゴルのゴビの自然を研究することに生涯を費やそうと彼が決意したことであろう。ところが、その研究生活の中で直面した多くの困難やそれを乗り越えるために彼が発揮した精神力については少しも深く掘り下げられておらず、ただ「何年も根気よく働きつづけ、ささいなつまずきや単純な問題、あるいは理解するのも難しいような困難に直面したあげくに、ようやくゴビの一大自然保護区が建設されたのだ」と述べられるだけで、頭によぎる程度にあっさりと済まされてしまっているのである。これは冒頭で始めた心理分析をとことん究めてはいない左証であろう。学問という険しい道をめざして意欲を燃やし、自分の才能や生涯のすべてをつぎこんできた、我が国の愛国的で勤勉な知識人たちがたどって来た道のりやその精神力を、作品は十分に分析しきっていないのである。

しかしながらこれは、底の浅い心理分析に終始してしまうとい

う、最近の長編小説に見られる共通した欠陥とも言える。S・ロチンの『齢の道』においても、「時代遅れの看護士」と言われて医師アマルトゥブシンが「目の敵」にされるようになったことを極めてリアルに分析してみせているものの、ハルハ河会戦に従軍したことについては箇条書きのような無味乾燥な記述になってしまっている。

そもそも、我々の考えでは心理分析には「直接的」なやり方と「間接的」なやり方の二通りがあっていいはずである。心の動きを直接的に描写する以外にも、心理状態をセリフや身振り、あるいは顔色の変化などによって間接的に表現することも可能なのだ。人間心理を直接・間接的に分析しようとするこの原理は、すでに一八世紀のセンチメンタリズム文学に浸透し、一九世紀ロシア古典文学、すなわちトルストイやドストエフスキーらに到って、人間の心理・思考・意思がどのように発生し、別の状態に姿を変え、そしてまた最初の地点に立ち戻り、いかにしてそこから新たな展開が生じるのかについて十全に描き出すようになったのである。かくして人間心理にひそむ「秘め事」の発生と展開を分析しようとするこの手法のおかげで、生活を驚くべきほど芸術的に描き出すことができるようになり、これを文芸理論家のN・G・チェルヌイシェフスキー[注11]は「心の弁証法」と名づけたのであった。直接間接を問わず心理分析の大原則となったこの手法をレアリズムの作者たちは創作方法の「柱」とすべきであろう。

事実、文芸批評家T・S・ハスバータル[注12]は書評「長編小説『大地』第三巻について」の中で、「D・マーム[注13]は自作において、社会生活の一般的状況と登場人物たちの心理の弁証法を、長大な時の流れの中に、芸術的手法を用いて描き出している。彼が、古い経典に述べられているように、『心臓の鏡を広げ、心の蓮を開く』技に、換言すれば心の弁証法を開示する技にさらなる磨きをかけていることが、『変転する時の流れに』と題されたこの第三巻からはっきりと伺える」(『ツォグ』一九八三年四号)と述べて、新たに独立を達成したモンゴル国について様々な階層の人々が千差万別の思いを抱いていることを例としてあげているのである。

また、間接的な手法で心理分析を行うことにかけては、ロシアの大文学者A・P・チェーホフこそ実に秀でた作家であった。ごく平凡な小役人イワン・ドミトリッチ・チェルヴャコフ(短編『小役人の死』〔一八八三〕の主人公)はオペラを鑑賞している最中に思いがけずくしゃみをしてしまう。ところが、運輸省勤めの勅任官ブリズジャロフ閣下が座席で禿頭や首をせっせと拭いながら何事かを呟いたのを見て、彼はこう思うのである。「唾をかけちまったんだ! 相手はうちの長官じゃなく無関係の人だが、やっぱりばつが悪い。おわびしなくては」そしてすぐさま全身を前に乗り出して閣下の耳もとで小声で謝罪を述べ、さらに劇終了後も何度も謝罪に押しかけてはブリズジャロフをうんざりさせたあげく、「真っ青になって躰を震わせている閣下」に「出ていけ」と怒鳴られて、「チェルビャコフの腹の中で何かが急にはじけたような気がした。そして彼はもう何も見ず、脇目もふらずに外へ出たが……無意識のうちに家にたどり着くと、服も脱がず、ソファに横になって……そのまま死んでしまったのである」。このよう

に全編を通じて「小市民」の複雑な胸の内を、セリフや行動によって間接的に描き出しているのである。

こうした創作方法は、現代ソビエトの作家たちが積み重ねてきた間接的心理分析の有効かつ興味深い試みによってさらに豊かなものになっている。例えばレーニン賞受賞作家であるノダル・ドンバージェ[注14]の『永遠の摂理』（一九七八）であるが、この小説は一風変わった構成になっていて、三人の主人公たちは共に入院生活を送っているのだが、彼らは自分や他人の運命について、ある時は各自でもの思いに耽り、またある時は互いに議論を闘わせ、さらには見舞客との比較さえ試みたりもするのである。ここでは本編の主人公のひとり、靴屋のボリックが人間心理をその人が履いている靴によって分析しているくだりを引用してみよう。ボリックは次のように言う。

「ぼくには靴を見ればそれがどんな人だか分るんです。先ほどあなたの所に見舞いにやってきたおしゃべり男も、靴を見たとたん、すぐにならず者だと分りましたよ」

「どうして分ったんです？」とバチャーナが訊ねた。

「まずヒールですね、ヒールにラッカーが塗ってありました」

「でも私なんか、それでてっきりどこかの教授とばかり思いましたけどね」とイオラム師がしたり顔でいった。

「ところがです、あの人は部屋に入るとすぐにズボンで靴を拭いたんですよ。そんなことをする教授がどこにいるんです？　それに二番目の点ですが、靴底が前の方から擦り切れてきているのに、ヒールの方は真新しいものでした。たぶんよそ行きの靴なんでしょう。きっとお偉いさんに会見するときだけ身につけてゆくに違いありません。つまりですね、お偉いさんの前に出るときにいつもつま先だって歩いているから、ああして靴先から擦り切れてしまったというわけです。こんな輩はペテン師になるくらいですめばいい方でしょう。さて三番目の点は、腰かけたとたんにぽろりと踵から靴が脱げ落ちてしまったことです。ということはつまり、彼はわざわざ小さすぎる靴をひっかけていたわけで、それは悲しそうな表情を作ろうという工夫だったに違いありません。最後に四番目の点ですが、あの靴のヒールは普通の人のものより三四センチは高いものでした。普段の自分よりもずっと背を高く見せようという魂胆でね。さあ、どうです？　一番肝心な点は人に馬鹿にされればそいつの喉元を締めつけてやるべきだってことです。ところが、このお人ときたら澄ました顔で出て行ってしまった。これこそ彼が人間のクズだってことの証しでしょう」

そして確かに、靴屋ボリックの目を通して作者が分析してみせたように、この男は煙草工場で働きながら何年も生活の糧を得ていたが、その間、様々な草を混ぜ合わせては大衆を欺き続け、そのいかさま行為が発覚しそうになるや、かつての級友である県の党委員長を高名な作家であるラミヤシビルに引き合わせやり、さらに自分の命を守ろうとして賄賂を贈るような「ならず者」なのである。

一方、わが国の作家たちも、近年、主人公の心理をこのようにセリフや外面的な状態によって分析しようと試みている。例えば、文芸誌『ツォグ』（一九八三年四-五号）に最近掲載された

S・ダシドーロブの長編『愛しの歌う砂丘』であるが、この中で母国のために命を犠牲にした戦士ソーリの母親ツェーペルが、息子が生きていることを固く信じて待ち続けるくだりや、しまいに疲労困憊のあまり心の病にかかってしまうくだりなどで、前述したような間接的な心理描写が用いられている。ツェーペルは軍靴の響きが聞こえると、「あたしは息子を見送ってやれなかったのだから、今度こそこの手で迎えてやらなくちゃね」と言って、人から借りた淡黄色の駿馬を引いて、郡の中心部まで何度も足を運ぶのである。誰も母親に息子の戦死を伝えてあげる勇気がないため、この哀れな老母は息子が無事でいることを固く信じこんでいる。それどころか、「肌に柔らかく、躰を温めてくれますように」と思い、羊毛製の上着を日向に干しているのである。しかも除隊した者たちはひとり暮らしの母親を気の毒がってこう言わずにはおれない、「息子さんもじきに帰ってきますから」。だが、若者たちの嘘もやがてばれる時がやってくる。そしてツェーペルは、この人だけは本当のことを教えてくれるだろうと信じてハドのもとへ赴くのだが、その時彼は一計を講じて次のような含みのある答えをする。「ねえ、お母さん……あいつは向こうで永遠に祖国を守る定めだったんですよ……」。この言葉は彼女の耳には心地よく響いて、「息子は今もあちらで祖国を守っているのよ」と人々に話すようになったのだった。『石より乳が出るまで、水より火が出るまで』息子を待ち続けた母親も、ハドの言葉に隠された意味を悟り、数日のうちに髪は真っ白になり、それまでかくしゃくとしていた躰も急に衰えてしまうことになる。そしてしまいに気が触れて、聞いたことと考えたことをごちゃ混ぜにして、聞くに耐えない、その場に居合わせるのもはばかられるようなことを人に話して聞かせるようになってしまったのだった。朝鮮にアメリカ軍が侵攻した時にも、ツェーペルは「あたしの息子はハルハ河で日本軍を鎮圧し、張家口の残党を成敗して、今度は朝鮮でアメリカの侵略軍と闘っているんです……」などと戯言を述べ、ベトナム戦争のニュースを聞けば、「あのベトナムで起こっている戦争はどうなっているんでしょうねえ。あたしの息子はあそこで闘っているんですよ。この戦争が終われば、きっと帰ってきてこのあたしを喜ばせてくれるに決まってます」とまで話すようになったのである。羊を放牧中に音楽班の車を見つければ、「英雄ソーリが帰ってきたのだ」と思いこみ、羊をそのままにして去ってしまうなど、戦争が人間の心にどれだけの爪痕を残すのかということを、狂った母親が心の中で戻らぬ息子を民話の英雄のごとく、世界中の戦争を鎮圧してまわる者として仕立て上げてしまったことによって描き出しているわけであるが、それによって内容的に見ても意味に広がりを持たせることに成功している。この小説は全編を通して、戦争功労者のハドが敵軍と戦った戦場をずっと後になって訪れ、そこで過去を回想するというやり方で書かれている。しかしながら、ハルハ河を訪れて多くの若者と知り合うくだりは、あまりに凡庸すぎ、心の深みまで分け入った心理分析ができていないようにも思われる。このシーンは老若ふたつの世代間のつながりや戦争体験のない現代っ子の道徳の問題という重要なテーマを、心理分析によって描き出すことも可能だったのではないだろうか。

さて、以上、近年のモンゴル文学において主人公の心理をいか

に「間接的」あるいは「直接的」に分析描写してきたのかを概観しようと努めたつもりである。現代のレアリズム文学における大きな成果である、心理描写によって主人公の性格の違いを際だたせようとするこの手法が有益かつ便利であるということがはっきりと見て取れるだろう。わが国の長編作家たちが作品の中で生活の本質を描き出そうとするとき、諸外国の文学や兄弟国の文学の新しい成果を真摯に見つめた上で、自らの作品に積極的に取り入れてゆこうとすることが、新たな道を模索する上で有用であることは疑いないところなのである。

（一九八四年三月二九日）

〔訳者後記〕

以上の評論は、モンゴルの文学批評アンソロジー『文芸批評―84』（"Utga zokhiolyn shüümjel-84",1986）に掲載されたセンデンジャビーン・ドラム氏による"Roman tuurvil dakh' setgeliin shinjilgeenii tukhai"(1984)の全訳である。

まず最初に本評論の著者ドラムについて簡単に紹介しておこう。

ドラムは一九五〇年にバヤンホンゴル県バヤンボラク郡の牧民の家に生まれた。一九六八年に同県ジャルガラント郡にある十年制中学校を卒業し、同年にはウランバートルのモンゴル国立大学文学部モンゴル語モンゴル文学科に入学、一九七三年に卒業した。卒業後から同大学で教鞭をとり、八二年には学位請求論文「モンゴル神話の表象と文学の伝統」（"Mongol domog züin dür, utga zokhiolyn ulamjilal"）で文学博士候補の学位を取得している。この論文で分るように、ドラムの専門は神話学やシャーマニズムといったものであるが、研究活動のかたわら評論家および詩人としても現在まで精力的に活動を続けている。主な著作として『モンゴル神話の表象』（"Mongol domog züin dür",1989）の他、詩集として『エーデルワイス』（"Tsagaan türüü",1978）、『雨降らしの石』（"Zadyn chuluu",1991）など。また、一九九〇年に起こったモンゴル作家同盟分裂の結果、ドラムは新しく設立されたモンゴル民族自由作家協会にその活動の場を移している。

（なお、ドラムの経歴及び最近の動向については本学の岡田和行助教授による論文『方便と般若―モンゴル現代文学史の再検討』（『東京外国語大学論集』第四八号、一九九四）に詳しいので興味のある方はそちらを参照して頂きたい。）

さて、以上でドラムの紹介は終わることとして、次に本評論を訳出した意図について少し述べておきたい。

訳者はこれまで主として八〇年代以降のモンゴル現代文学及び現代文化の分野で研究を行ってきたが、その過程で現在出版されている文学作品や映画などの多くに共通して見られるひとつの傾向に気がついた。それは何よりも冗長なまでの心理描写であり、同時にそうした心理描写の結果たち現れる情緒性であったのである。

確かに、「心理主義」というターム自体、きわめて曖昧なことばではあって、極言すれば人間心理を描くという意味ではあらゆる文学が「心理主義」的といえなくもないのだが、一方、人間心理を文章の間ではなくモノローグによってどこまでも直接的に描こうとするモンゴル文学の傾向を目の当たりにした時に、そこに

ある種の違和感を感じてしまうこともまた事実である。

だが、こうした違和感に基づき、心理主義的な傾向を「後進的」なものとして退けるのは間違いである。なぜなら、そうした見方はあまりに「文学的価値」という名の偏見に縛られているのであって、偏見から目をそらし、その上で文学を文化の一形態として捉えなおしてみるならば、一見後進的と見られた「心理主義」や「叙情性」が実は社会的コンテクストから生み出されたひとつの「文化」のあり方であったことが見えてくるからである。

しかしそうした観点からモンゴル文学史を見渡した場合、残念ながら従来の「文学史」は作家論やテーマ研究が中心を占め、「心理主義」といったひとつの傾向を歴史的・社会的コンテクストの中できちんと位置づけた著作はほとんどないのが現状である。そうした意味で、今回訳出したドラム氏の評論は「心理主義」を中心に据えて論じた興味深い論考であり、モンゴルの心理主義の流れを考える上で様々な示唆を与えてくれるものだと言えると思う。

ただし、最後に一言加えるならば、訳者自身はドラム氏の意見を全面的に支持するものではもちろんない。この評論の中で、氏は主にモンゴルの心理主義をソビエト文学との関わりの中で捉えているわけであるが、その関連にしても深く掘り下げられているとは言い難いし、何よりも「心理主義」の問題は、体制や社会的コンテクストとの結びつき、あるいはソ連経由で輸入されたロマンティシズムがモンゴルにおいていかに変容したのかなど、より多層的に捉えられなければならない問題なのである。残念ながらここではこれ以上詳しく触れる余地はないが、これらの諸問題については、今回訳出した評論をひとつの足掛かりにして、いずれ稿を改めて論じるつもりである。（なお、映画における心理主義については、主に社会的コンテクストの側面から論じたものとして拙論「モンゴル映画の変質―七〇年代に何が起こったか」[国際交流基金アジアセンター主催「モンゴル映画祭」パンフレット、一九九八]があるので興味のある方は参照してほしい）

〔訳注〕

1　「心理主義」という訳語について一言述べておく。ここでのモンゴル語原文は setgeliin shinjilgee であるが、これを普通に訳すならば「心理分析」という意味になる。しかしながら、ロシア語で「心理主義」を意味する psikhologizm が併記されていることから、本評論の中では setgeliin shinjilgee を「心理主義」及び「心理分析」という二重の意味で用いているようである。またこの他にも、setgeliin shinjilgee の動詞形である setgeliig shinjilekh も用いられているが、モンゴル語はしばしば動詞を名詞的に用いることも多く、ここでは文脈に応じて、「心理分析」、「心理を分析する」等に訳し分けておいた。

2　ここでは「反心理主義」を標榜していた文芸評論家の名前までは具体的にあげられていないが、恐らくはロシア・アヴァンギャルド末期に登場した雑誌『新レフ』のメンバーによる一連の文学活動を指しているのだと思われる。『新レフ』は、一九二五年に終刊した雑誌『レフ』のメンバー（マヤコフスキー、トレチャ

コフ等）が新たに再起を計るべく一九二七年に創刊した雑誌だが、彼らは従来、文学において重要なファクターとされていた虚構性やプロットの役割を極力低下させ、あくまで現実に根差した「事実の文学」を主張した。当然のことながら、そこではあらゆる観念的なものがその価値を低下させることになるが、もちろん、「心理主義」もその例外ではなかった。例えば「作家心得」と題された評論家ニコライ・チュジャーク（一八七九-一九三七）の次のような文章はそれを端的に示している。

かつての文学は、例外なく個人主義的であった一個人（「人格」）の内的な世界で作られたものだという意味において。それはまた例外なく観念論的でもあった。人間を通して新しい物質を得るための戦いの「プロセス」の曲折のみを評価し、肝腎の「物質」を（それ自体として）軽視したがゆえに。その結果として、われわれは、よかれあしかれ、人間の「魂」について知っているが、人間を作り直すべき世界についてはほとんど何も知らないのである。

このために人類は苦しんでいるのだ。

「心理主義」を何らかの形で「圧縮」することで、人類の前進という戦闘は勝利を収めるのである。

（水上則子訳、『ロシア・アヴァンギャルド8　ファクト』〔桑野隆、松原明編、国書刊行会、一九九三〕所収）

3　Namdag, Donrovyn (1911-1984)

ウブルハンガイ県タラグト郡に生まれる。モンゴル近代文学成立の立役者のひとりであり、二〇年代にはモンゴル文学の父と呼ばれるダシドルジン・ナツァグドルジらとともにドイツ留学を果たしている。ナムダグは小説家でもあり、詩人でもあるが、特に戯曲家として、また演出家としてモンゴル演劇界で果たした役割は大きい。三四年より創作活動を開始、一九六四年にはゴーリキー記念文芸大学を卒業。七一年には国家賞を受賞している。有名な戯曲としてゲセル・ハン物語に題材を求めた『シャライゴルの三人の王』（一九六一）など。

4　Lodoidamba, Chadraabalyn(1916-1969)

ゴビ・アルタイ県トゥメン郡に生まれる。小説、戯曲、文学研究の分野で活躍。一九五四年にモンゴル国立大学を卒業。五九年にはソ連共産党中央委員会付属社会科学アカデミーにて博士候補生学位を修得している。多年に渡り、文化省副大臣として活躍、五三年と七一年には国家賞を受賞（七一年は没後受賞）。人民革命の勝利を描いた歴史小説『清きタミルの流れ』は彼の代表作であり、七〇-七三年にかけてドルジパラム監督により映画化もされて小説・映画ともに未だに高い人気を保っている。その他の作品としては『帽子をかぶった狼』（一九四六）、『アルタイにて』（一九四九）、『私たちの学校』（一九五二）など。

5　Rinchen, Byambyn(1905-1977)

セレンゲ県のボル・サライに生まれる。一九二二年よりレニングラードの東洋大学に留学。一九五六年にはモンゴル科学アカデ

ミーより言語学博士の学位を授与される。創作活動は二三年より開始、四六年には映画『ツォクト・タイジ』の脚本によりチョイバルサン賞（後の国家賞）を受賞。リンチェンは作家であると同時に、言語学、民族学などの分野でも有名であるが、彼の代表作であり、豊穣な語彙を駆使して書かれた歴史ロマン『曙光』には彼の学者としての力量が遺憾なく発揮されている。ただし、生前の境遇としては三七・四二年にかけて投獄の憂き目を見るなど様々な形で迫害を受け、その反動からか九〇年代以降は民主化の象徴として急速にリンチェンの復権が成し遂げられていった。リンチェンについては一九八八年一二月九日付けの「文学芸術」紙に掲載されたG・アキムによる論文「砕けることなき宝石」（岡田和行訳で『日本モンゴル学会紀要』No・20に掲載）に詳しいのでそちらを参照して頂きたい。

6　Tüdev, Lodongiin (1935-)

ゴビ・アルタイ県ナラン郡生まれの詩人、小説家。一九五六年に国立師範大学を卒業、六七年にはソ連共産党中央委員会付属社会科学アカデミーの修士課程を修了。モンゴル人民革命党には一九五八年に入党し、その後、モンゴル革命青年同盟中央委員会第一書記官、人民革命党中央委員会委員、人民会議議員として活躍。六八年に革命青年同盟賞、七一年に国家賞、七七年にはモンゴル作家同盟賞をそれぞれ受賞している。

一九五〇年より創作活動を開始し、七三-七六年には作家同盟副議長および議長を歴任した。主な作品として『洪水』（一九六〇）、『永遠の水』（一九六九）などがあるが、言語学博士候補生でもあるトゥデブには、『モンゴル人民革命党の文芸政策』（一九七一）などの学術的な著作も多い。ちなみに、ここであげられている『遊牧と定住』は協同組合化運動をめぐる登場人物の様々な葛藤を描いた作品。

7　Lochin, Sonomyn (1939-)

ゴビ・アルタイ県ダリブ郡に生まれの小説家、翻訳家。六八年にモンゴル人民革命党入党、七三年にはモンゴル国立大学を卒業し、文化省付属出版局の編集長として活躍。

六五年より創作活動を開始、七三年には長編小説『心の彩』で労働組合中央評議会文芸賞を、七九年には『ひと続きの七日間またはふたりの話』でモンゴル作家同盟賞を受賞した。

8　Erdene, Sengiin(1929-)

ヘンティ県ビンデル郡生まれの小説家、詩人。一九四九年にウランバートル市のスフバートル記念士官学校、一九五五年にはモンゴル国立大学医学部を卒業。四九年より創作活動を開始、多年にわたり「文学芸術」紙の編集長として活躍。六五年には国家賞を受賞した。エルデネは短編の名手として知られ、その精緻な心理描写と叙情性で今日の作家たちに多くの影響を与えた。主な作品集として、『春を迎えるとき』（一九五九）、『真昼の星』（一九六九）が、また中編として『青い鼠年』（一九七〇）などがある。

9　Dashdoorov, Sormuunirshiin(1935-)

ドンドゴビ県デルゲルハンガイ郡に生まれる。詩人、小説家、児童文学者、映画原作者。

一九五五年、国立師範大学を卒業、六九年にはモスクワのゴーリキー記念文芸大学文芸科上級コースを修了した。五〇年より創作活動を始め、主として愛国的なテーマや道徳問題を扱った作品をものしてきた。主な作品として、短編集に『平原の光』（一九五八）が、長編小説に『ゴビの高み』（一九七六）などがある。なお、一九六九年には作家同盟賞、七四年にはモンゴル革命青年同盟賞を、さらに七五年には国家賞を受賞している。

10　モンゴルには各地に馬乳酒を利用した療養所が設置されている。これは馬乳酒には結核菌やぶどう球菌などの増殖を妨げる効果があるといわれているためで、三〇年代から四〇年代にかけて、結核治療の目的で療養所が設立されたのである。

11　Chernyshevskii, Nikolai Gavrilovich (1828-1889)

哲学、経済、文学など多方面で活躍したロシアの思想家。「純粋芸術」を否定し、芸術の社会的使命を強調。協同組合と農村共同体を基盤とした革命論ではナロードニキ運動の理論的基盤を作り、独自の弁証法的解釈による後進国の社会主義発展論はマルクスの後進国革命論にも一定の影響を与えた。一八六二年に逮捕、投獄、六四年にはシベリアに流刑、強制労働に従事した。後、八九年には故郷のサラトフに帰郷を許可されるが、脳溢血で死亡した。主な著作に、『哲学の人間学的原理』（一八六〇）、『何をなすべきか』（一八六三）など。

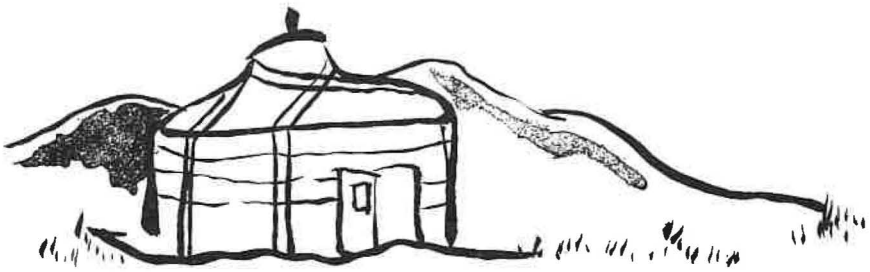
12　Tsevegjavyn, Khasbaatar (1930-)

ウランバートルに生まれる。一九四八年、中学校を卒業、五三年にはモスクワ市にあるロモノソフ記念大学を卒業した。専攻はジャーナリズム。中学時代より創作を始め、処女作品を「ピオネーリン・ウネン」紙に投稿したが、以後、評論家に転向、五四年より様々な媒体に評論を発表する。現在のモンゴルの古参評論家であり、また翻訳家として外国文学の紹介に尽力した。主な著作として『文学について』（一九七三）、『批評研究、翻訳』（一九八〇）、『文学雑記』（一九八九）など。

13　Dugerjavyn, Maam(1935-1995)

スフバータル県トゥブシンシレー郡に生まれる。一九五七年に国立師範大学卒業後、モスクワにある国際関係大学に入学、一九六六年に卒業した。教職に就いた後、教育省付属出版局、科学アカデミーなどの職場を経験する。創作活動は一九五七年より開始し、最初は詩人として出発したが、後は主として散文作品をものするようになった。一九八三年には作家同盟賞を受賞、『大地』は彼の代表的な作品である。

14　Dumbadze, Nodar Vladimirovich(1928-1984)

トビリシ生まれのグルジア系ソビエト作家。一九五〇年、トビリシ大学経済学部卒業。一九四八年より創作活動を始め、一九五八年には処女作となるユーモア小説集『田舎の少年』を出版。主な長編作品としては独ソ戦争当時のグルジアの生活を描いた『太

陽が見える』（一九六二）や国境警備隊員の活躍を描いた『怖がらないで、お母さん！』（一九七一）など。一九八〇年には本評論で取り上げられている『永遠の摂理』（一九七八）でレーニン賞を受賞。訳者は彼の作品について多くの情報を持たないが、ソビエトの文芸百科“Kratkaya Literaturnaya Entsiklopediya”（モスクワ、一九七八）によれば、その作風の特質は高度な叙情性と人間に対する深い信頼にあるという。上記のように愛国的な作品が多いことも考え合わせればむしろ体制寄りの作家であったと思われるが、ソビエト文壇でのドンバージェの位置づけなどについては今後の課題とし、また識者の御教授を待ちたいと思う。なお、一九六四年には共産党に入党、一九七三年よりグルジア作家同盟書記を務めている。